〃　一〇年度	二八、〇七六・一八	四六、一九四・七四	四八、九九四・四一
〃　一一年度	二七、九六三・六一	五六、八四三・一二	五九、九一一・三三
〃　一二年度	二六、二三四・一二	五八、八五一・三五	七二、八三三・一九
〃　一三年度	三九、五〇四・八六	六九、八八一・一六	八一、八一七・九七
〃　一四年度	五八、二五三・三九	六七、八四六・七六	八九、九〇二・二八
昭和元年度	五四、九九〇・八二	八一、四六二・四〇	一〇一、五〇八・五一
〃　二年度	六九、二五一・三九	八二、九三一・〇一	九七、四九九・九七
〃　三年度	六〇、九三六・一一	一〇六、七二四・七一	一二九、六五二・六六
〃　四年度	六三、二四九・三八	一一八、五三七・九三	一三七、三一六・〇四
〃　五年度	五六、〇七九・六九	一三八、六一三・八〇	一五二、〇二九・七四
〃　六年度	五二、〇四二・七一	一四〇、〇二三・五五	一五一、四一二・七三
〃　七年度	五二、二一三・一九	一四四、〇五七・〇五	一五三、〇二〇・四〇
〃　八年度	五一、八七七・八八	一四五、五九九・六四	一五三、一五一・八〇

(四) 本會の事業の概要

本會の會員は日本內地はもとより鮮滿、臺灣、樺太並に遠く外國に迄も互つて居り、是等の會員に對し充分に本會の目的を徹底せしむることは容易の業にあらざるも、創立以來役員諸氏は全會員と協力一致して此目的の達成に向つて其最善を盡し來たつたのである。而して此目的のために本會は機關誌の發行及講演會を開催し會員各位の獨創的の研究、調查、其他を發表し、又每年各地へ見學視察旅

行を催して、一般會員の斯學に關する智識の啓發に資することにして來たのである。尙此外本會に於ては各種の調査委員會を設けて各種の調査研究をなし、又廣く諮問に應じ以て學會としての職責を盡して來たのである。以下其內容を少しく記載することゝする。

1　機關雜誌の發行

本會の機關雜誌は土木學會誌と稱し、創立以來昭和三年迄每年六回宛發行し來たのである。會誌の體裁は從來竪組なりしを、大正十三年第十卷第一號より之を橫組と更め字數を增加し、內容を豐富になせるも、斯くの如く隔月發行にては到底斯界の發展に副ふことを得ざるにより、昭和五年一月第十五卷第一號より之を年十二回卽ち每月發行とすることに更め、爾後今日に及んで居るのである。

2　各種の調査委員會

本會に於ける事業の一として、既往に設置されたる調査委員會は大小種々あるも、今主なるものを揭ぐれば、大正六年五月帝國鐵道協會と協同して東京市內外交通調査委員會を組織し、東京市內外に於ける交通に關する調査をなしたのである。當時會を重ねる事三十餘回に及び、大正八年六月其調査を完了し、其調査報告を發表した。該報告書は土木學會誌第五卷第六號附錄として、一般會員に配布した、次で大正九年二月大阪市長よりの依囑により、大阪市內外高速交通機關に關する調査を行ひ、

帝國鐵道協會と協同のもとに、大阪市内外高速鐵道調査會を組織し調査を進め、大正十二年三月、其調査を完了の上報告せり。該報告書は第十一卷第五號附錄として一般會員に發表したのである。又大正十年四月本會は帝國鐵道協會と共同して、東京及横濱附近の交通調査を爲したのであるが、曩に大正八年に東京市内交通に關する調査を遂げたるが、該調査は專ら旅客交通を主としたるもので、貨物運輸に就ては比較的其の調査研究を他日に讓りたるを以て、東京及横濱附近交通調査會なるものを設け、專ら貨物運輸に關する企畫を樹立せんことを期し、同年七月第一回委員會を開き、之が調査の範圍並に方針等を明にし、爾來三年有餘の歲月を費し二十數回の會議をなし、全般の調査に當り各種の書類を徵して審議を盡し、或は實地に就きて視察を遂げ反覆討議の結果大體の成案を得たのであつたが、偶々大正十二年の大震火災に遭遇して關係書類を爲有に歸せしめたが、貨物停車場と連絡する道路及運河に關する調査は再調容易ならざるのみならず、震災後當時の事情は寧ろ之を復興局に讓るを妥當としたるにより、貨物停車場の配置、鐵道線路及操車場の位置選定、東京及横濱に於ける港灣施設の大要を土木學會誌第十二卷第二號附錄として發表したのである。

大正十二年九月關東地方に於ける大震災に鑑み本會は、東京及横濱の復興計畫に關する調査委員會を設け、土木學會帝都復興調査委員會の名稱を附し、兩市及び其附近に於ける鐵道高速度交通機關、

道路、公園及廣場、運河及港灣其他に就き調査並に審議を遂げ意見書を作成し、時の內閣總理大臣及內務、鐵道、遞信の各大臣並に帝都復興院總裁に建議し、尙東京府知事、神奈川縣知事及東京、横濱兩市長に之を提出したのである。尙上記以外に帝都復興計畫に關し、各專門の方面より斯道研究者會合し充分なる意見の交換を行ひ、以て適當の成案を作成し關係當局に建議するは時宜に即したる措置なりと認めたので、東京市政調査會より、本會に對し其主催者として贊同方の照會に接したるを以て、同年十二月八日土木學會、東京市政調査會、工政會、都市研究會及建築學會の聯合主催の下に、各學會協會等より三名以內の代表者を選出して帝都復興聯合協議會を組織し、政府の公表せる帝都復興計畫案及同事業豫算案等に就き愼重審議の結果意見書を作成し、之が實行方を關係當局に建議したのである。尙大地震の土木工事に及ぼせる災害の最も正確なる記錄を作製し、之を後世に傳へ以て將來土木建築工事上の參考指針たらしむが爲めに、大正十三年一月特に本會に於て震害調査會を設け、調査に當りては調査事項を第一部河川、灌漑、砂防、運河、港灣、第二部橋梁及び建物、第三部上水道、下水道及び瓦斯工事、第四部鐵道及び軌道、第五部發電關係土木工事、第六部道路の六部門に分ち、各部門毎に當該方面の權威者よりなる分科委員會を組織し資料の蒐集、撰擇、被害の攻究に當つたのである、上記の委員は委員長に故廣井勇博士を推し委員は七十名であつた。尙本調査會の調査完

了を待つて逐次該報告として第一卷は大正十五年八月に、第二卷は昭和二年一月に、第三卷は同年十二月に、都合三冊より成る、浩翰なる報告書を印刷公表したのである。

東京高速鐵道調査會 （大正十三年一月設置）

大正十三年一月高速鐵道調査委員會を設置し、委員長に古川阪次郎を、他に委員二十四名を依囑し東京市内外に於ける高速鐵道に關する調査研究をなし、昭和三年十二月其調査を完了したのである。

コンクリート調査會 （昭和三年九月設立）

昭和三年九月、混凝土調査會を設け、委員長大河戸宗治氏他委員六十二名を依囑し、一般混凝土に關する調査研究を行ひつゝあるものであるが、右は輓近混凝土工學の發達に伴ひ、土木事業に於ては大いに之が利用に依り工事實施上一新紀元を劃するに到り、又從來之が使用に際しては施工上各所任意に示方其他を定め此間何等の統一なく、斯る狀態では斯業の發展上頗る遺憾の次第であつたので、統一的のものの調査選定を行つたのである。本調査會設立以來各委員の熱心なる努力に依り三箇年に亘り此間數十回の委員會を開き愼重審議を重ね、昭和六年九月鐵筋混凝土標準示方書を發表し、次で同年十月同示方書の解說を發表し爾後引續き調査中である。

用語調査會　（昭和三年九月設立）

昭和三年九月本會に用語調査會を設置し、委員長中山秀三郎氏他委員百二十七名を依囑し、土木工學に關する主要用語を調査し、特に之が定義及解釋を主とする調査を行ひつゝあるもので、目下二千數百語に對し略其調査を了して居るが引續き調査中のものである。

世界動力會議大堰堤國際委員會日本國內委員會　（昭和六年三月設立）

昭和六年三月本會は日本動力協會及電氣協會の三會聯合のもとに、國際會議大堰堤國際委員會へ加盟し、日本國內委員會を組織し各會より委員各六名宛を選出し、尙本會より更に專門委員三十名を依囑して現在繼續中のものである。

土木建築士法案調査會　（昭和六年九月設置）

昭和六年九月本會に土木建築士法案調査委員會を設け、委員長を那波光雄氏とし、以下四十名を依囑した。右は時世の進運に伴ひ、今後益々斯界の統一上にも亦發展上にも最緊要と認め、研究をなすことになしたるものにして、爾來引續き調査中のものである。

維新以前日本土木史編纂委員會　（昭和七年九月設立）

昭和七年九月本會に維新以前日本土木史編纂委員會を設置した。其目的とする所は、古來本邦に於

て相當著名なる土木工事の施工せられたるもの尠からざるにも拘はらず、現在維新以前に於けるものは、其資料多くは散逸して、先人の偉大なる遺業も詳細に之を知ることは困難の狀態なるのみならず、今後年を經るに從ひ、益々甚しくなるは明かなるを以て、極力之が資料を蒐集の上編纂し以て先人の遺業を明かにし、溫故知新に備ふるは學會當然の責務と認め、本委員會を設置したるものにして、委員長に田邊朔郎氏、副委員長に眞田秀吉氏を擧げ、他に常務委員二十三名、地方委員六十二名を依囑し、目下鋭意調査中のものである。

3 優秀論文に對する土木學會第一土木賞牌の授與

本會規則第三十五條に基き、毎年土木學會誌に登載したる論說報告中優秀と認めたる論文に對し、第一土木賞牌を授與したる論文名及執筆者其他は次の如くである。

年度	題目	掲載會誌	氏名
大正九年	載荷せる構造物の震動竝に其耐震性に就て	第六卷第四號	工學博士 物部長穗
大正十年	混凝土の彈性係數に關する實驗	第七卷第六號	工學博士 日比忠彥 工學士 高橋逸夫
大正十一年	神戶稅關海陸運輸聯絡設備概要	第八卷第四號	工學士 森垣龜一郎

大正十二年	繋船岸壁の構造及之が築設に關する構造上の私見	第九卷 第四號	工學博士 工學士 高西敬義
大正十三年	矩形床版の撓度並に應力に就て	第十卷 第六號	工學士 井口鹿象
大正十四年	拱橋の設計に就て	第十一卷 第五號	工學博士 工學士 大河戸宗治
大正十五年	支線式無線電信柱	第十二卷 第四號	工學博士 工學士 草間偉
昭和二年	Yerdrchungsversuche nit Undewehrten und Bewehrten Betonkörpern"	第十三卷 第一號	工學士 宮本武之輔
昭和三年	Thermal Flexure of a Thilplate Heated on one Surface	第十四卷 第三號	工學士 山口昇
昭和四年	Extortional Stresses taken into Account On Strength of Columns with Variable Cross Sections	第十五卷 第三號	工學士 田中豐
昭和五年	C. Runge's Therem に依る積分曲線を用ひて種々なる Surge Tank の研究	第十六卷 第七號	工學士 新井榮吉
昭和六年	單鉸拱模型試驗 單鉸拱振動に關する考究	第十七卷 第十一、十三號	工學博士 工學士 三浦七郎
昭和七年	沈降速度の理論及實驗	第十八卷 第十號	工學博士 工學士 鶴見一之
昭和八年	"Therorie der Roste und ihre Anwendungen"	第十七卷 第五、十號 第十八卷 第六號 第十九卷 第七、十號	工學博士 工學士 福田武雄

4 講演會の開催

本會定例講演會は毎年少くも、三回以上を開催し、現在迄に六十五回に及んで居るのである。

5 見學視察旅行

見學視察旅行は、本會創立以來毎年春期に於て一回催すを例とし來たれるも、會員多數の要望により事情の許す限り昭和八年以來數回開催することに更めたのである。次に既往に於ける見學視察旅行先を掲ぐれば左の通りである。

回數	年月日	視察箇所
第一回	大正五年五月六・七日	足尾銅山
第二回	大正六年五月五・六日	日立鑛山
第三回	大正七年五月五日	房總線勝山地方
第四回	大正八年五月十二日	横須賀軍港
第五回	大正九年五月十五・十六日	山梨縣下谷村町附近水力電氣工事（桂川水力、東京電力）
第六回	大正十年五月十四・十五日	鐵道省上越南線建設工事
第七回	大正十一年五月十三・十四日	熱海線丹那隧道工事
第八回	大正十二年五月五・六日	利根川（下流）改修工事
第九回	大正十三年四月二十七日	東京市村山貯水池工事及境淨水場
第十回	大正十四年五月十六・十七日	靜岡縣清水港
第十一回	大正十五年五月十五・十六日	利根川及江戸川改修工事
第十二回	昭和二年四月二十八日・五月一日	名古屋地方大同電力會社大井ダム大日本ビール會社工場及鐵道省木曾川橋梁工事

第十三回	昭和三年五月十二 十五日	北陸地方庄川水電及日本電力發電工事
第十四回	昭和四年四月二十八 二十九日	關西方面土木事業
第十五回	昭和五年五月十 十一日	群馬縣下關東水力電氣會社佐久發電所東京電燈株式會社澁川發電所及鐵道省清水隧道工事
第十六回	昭和六年三月二十一 二十二日	伊豆地方及清水港震害狀況
第十七回	昭和七年四月二十九 三十日	大阪驛改良工事大阪地下鐵道工事 龜ノ瀨隧道附近地辷被害狀況
第十八回	昭和八年五月六 七日	神奈川靜岡兩縣下道路工事及丹那隧道工事
第十九回	昭和八年十月二十八 二十九日	大島
第二十回	昭和九年六月九 十一日	鐵道省信濃川水力發電工事並に新潟港
第一回見學會	昭和九年三月二十四日	川崎市所在、明治製菓株式會社、東京製鋼株式會社、東京電氣株式會社
第二回見學會	昭和九年五月十二日	村山貯水池
第三回見學會	昭和九年七月七日	橫濱港及東京灣埋立地
第四回見學會	昭和九年九月二十九日	內閣印刷局瀧野川工場及日本ビール會社川口工場

6 各種の大會

第一回工學大會

昭和二年には工學會の主催により同年十一月三日より同七日に涉り工學會大會を東京帝國大學構內安田講堂に於て開催し總會當日には本會代表講演として會長工學博士市瀨恭次郎氏により「明治維新

以降我邦に於ける土木施設の一斑に就て」と題し講演あり次で同會期中土木部會として二日に亙り、東京商工奬勵館に於て、講演會を催し本會々員中より井上範氏、山口昇氏、廣中一之氏、小野基樹氏、牧野雅樂丞氏、大河戸宗治氏、橋本敬之氏、島重治氏、安藝杏一氏、新井榮吉氏、瀧山與氏、吉田德次郎氏の十二名により講演あり、尚東京市並に其附近に於ける、各種の工場其他の見學視察を行つたのである。

萬國工業會議

昭和四年には工學會の主催を以て同年十月二十九日より同十一月七日に亙り、東京市に於て萬國工業會議を開催した、本會も之が開催には多大の協力をなし、會議の議長には、前會長古市公威氏就任し、副會長には、各學會長之に當り、本會より當時の會長たりし、田邊朔郎氏就任せられた、又同會議の部會として土木部會、鐵道部會開會の際には、本會員中より數名座長となり、又會員中より同會議へ論文の提出ありたるは、九十九名に昇つたのである、同會期中十一月四日東京市芝區淺野紫雲閣に於て、本會及港灣協會並に道路改良會の三會聯合にて同會議海外會員中の土木關係者九十餘名を招待し盛大なる午餐會を催したのである。

應用力學大會

昭和六年十月三十一日より十一月二日の三日に亙り、本會及建築、機械、造船、火兵の五學會聯合主催で應用力學大會を開催し本會々員福田武雄氏、吉田彌七氏、青木楠男氏、井口鹿象氏、稻田隆氏、木村二郎氏、久野重一郎氏、田中豐氏、鷹部屋福平氏、堀越一三氏、安藏善之輔氏、山口昇氏、物部長穗氏の十三名により論文の發表があつた。

第二回工學大會

昭和七年四月五日より同九日の五日間に亙り日本工學會主催にて本會他十一學會聯合にて第二回工學會大會を東京帝國大學大講堂に於て開催した總會當日には本會代表講演として副會長工學博士大河戸宗治氏の「鐵筋コンクリートの將來に就て」と題する講演あり次で同月六日及七日の二日間東京帝國大學工學部第一號室に於て土木部會を開き會員小野諒兄氏、高橋甚也氏、松尾春雄氏、平井喜久松氏、西川榮三氏、福田武雄氏、吉田德次郎氏、井上隆根氏、菊地英彥氏、山崎匡輔氏、田中吉政氏、武居高四郎氏の十二名により講演を行つたのである。

次で同月八、九日は東京附近に於ける著名なる工場及工事其他の見學をなし、尙參加會員により新宿御苑の拜觀及兩日各午後六時より朝日講堂に於て通俗講演會を開催し、本會より會員滿鐵技術部次長根橋禎二氏により「最近の滿蒙に於ける鐵道に就て」の演題の下に講演を行つたのである。

7 關西支部の設置

從來關西地方は關東に次で會員比較的多數在住し早くより大阪に本會支部開設の要望盛んになりしため、昭和二年十月三十一日の役員會に於て、本會關西支部を大阪市北區堂島中二丁目九番地に設置することに決議し、同年十二日十六日開設せり支部に於ける事業其他は次に掲ぐる支部規定に基き施行しをるもので、爾來斯界のために幾多の效果を擧げてをるのである、支部開設以來今日迄の支部役員氏名は次の通りである。

土木學會關西支部規定

第一條　大阪ニ支會ヲ置キ之レヲ關西支部ト稱ス

第二條　支部ニ支部長ヲ置キ支部ニ關スル一般事務並ニ左ノ事業ヲ委囑ス

講　演　會

見學旅行　　土木ニ關スル研究調査

前項以外ノ事業ニ就テハ會長ノ承認ヲ受クルヲ要ス

支部長ハ本會役員會ニ出席シ意見ヲ述フルコトヲ得

第三條　支部長ハ左ノ府縣在住ノ會員ノ互選ニヨリ會長之ヲ委囑ス

京都府、大阪府、兵庫縣、奈良縣、滋賀縣、和歌山縣

第四條　支部長ノ任期ハ一箇年トシ重任スルコトヲ得ス

第五條　支部ニ左ノ職員ヲ置キ支部長之ヲ委囑シ會長ニ報告スルモノトス

商議員　若干名
幹事長　一名
幹事　若干名

第六條　支部長ハ毎年十月ニ於テ翌年一月ヨリ十二月ニ至ル一箇年收支豫算ヲ調製シ會長ノ承認ヲ受クヘシ

第七條　支部長ハ毎年一月十日迄ニ於テ前年中ノ收支決算並ニ事業一般ニ付會長ニ報告シ收支決算ニ付テハ其ノ承認ヲ受クルモノトス

第八條　支部長ハ支部職員ノ數、任期其ノ他ニ關スル内規ヲ作製シ會長ノ承認ヲ受クルモノトス

附則

第一回ノ支部長ハ發起人會ノ選擧ニヨリ會長之ヲ委囑ス

	昭和三年	昭和四年	昭和五年	昭和六年
支部長	眞田秀古	直木倫太郎	坂本助太郎	島重治
商議員	後藤佐彦	川口愛太郎	荒木文四郎	岩田成實
〃	坂出鳴海	田邊良忠	近藤博夫	高橋逸夫
〃	直木倫太郎	瀧山與	島重治	高橋三省
〃	木村芳人	高西敬義	清水凞	安田靖一
〃	上田寧	高田景	高橋逸夫	古川淳三
〃	牛島航	永井專三	高西敬義	近藤博夫
〃	阪本助太郎	牛島航	調所武光	後藤佐彦
〃	田邊良忠	坂本助太郎	永井專三	荒木文四郎

	〃	〃	〃	〃	幹事長	幹事	〃	囑託
	森垣龜一郎	瀧山與	大井清一	村山喜一郎	後藤佐彦	平瀨三雄	鈴木義一	上田令吉
	木村芳人	清水凞	島重治	平野正雄	後藤佐彦	平瀨三雄	鈴木義一	上田令吉
	平野正雄	古川淳三	松島寛三郎	三輪周藏	後藤佐彦	平瀨三雄	鈴木義一	上田令吉
	青木精一	調所武光	三輪周藏	澁江武	近藤博夫	平瀨三雄	鈴木義一	上田令吉

	支部長	商議員	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
昭和七年	後藤佐彦	青木精一	岩田成實	內山新之助	上井兼吉	岡部三郎	木村喬	澁江武	高橋誠一
昭和八年	岩田成實	上井兼吉	內山新之助	大木外次郎	岡部三郎	木村喬	齋藤飾	柴田辰之進	島崎孝彦
昭和九年	松島寛三郎	大木外次郎	近藤泰夫	齋藤飾	島崎孝彦	柴田辰之進	杉谷茂	富田惠四郎	平瀨三雄

商議員	高橋省三	武居高四郎	福留並喜
〃	武居高四郎	中村與一郎	三浦矩明
〃	中村與一郎	平瀬三雄	吉岡計之助
〃	安田靖一	三浦矩明	與田喜知藏
幹事長	近藤博夫	近藤博夫	近藤博夫
幹事	鈴木義一	鈴木義一	高橋末次郎
〃	平瀬三雄	高橋末次郎	柴田辰之進
書記長	上田令吉	山本留次郎	山本留次郎